

Tree as Architecture

－ウィズコロナ時代における樹木の下での活動の可能性－

代表研究者 塚本 由晴 (東京工業大学環境・社会理工学院建築学系 教授)

共同研究者 貝島 桃代 (スイス連邦工科大学 ETH 教授)

共同研究者 増井 柚香子 (東京工業大学環境・社会理工学建築学系 博士課程1年)

[研究報告要旨]

コロナ禍を経て、過密な都市では屋外の利用に注目が集まった。その中でも樹木の下は夏季に快適な環境が期待できるだけでなく、癒しの場にもなり、仏陀がボダイジュの下で悟りを開いたなど宗教的文脈にも位置づけられることから、樹木は人々の拠り所となる。しかし、日本の都市は天災や戦災による破壊を体験し、かつ復興後も経済成長によって都市環境の更新が途切れなく続くために大樹が少なく、その下に人を誘う設えも乏しい。一方日本以外のアジアの国々では、都市にも大樹があり基壇や祠などが設けられ、人々の居場所になっている。本研究では、樹木を拠り所として人やモノが集まることを、樹木の生育環境と人の生活環境の重なりと捉え、「Tree as Architecture-建築としての樹木-」と呼び、アジアでの現地調査により事例を収集し、立地、樹種・樹形、熱光風環境、人のふるまい、それを支える設えの関係を検討することで、そのあり方の一端を明らかにすることを目的とした。立地は、繁華街、広場、水辺、水聖地、田畑とした。樹形は、ガジュマルやボダイジュなどの横広がり型・複円形と上広がり型・複円形、エンジュ、マグワなどの横広がり型・円形、ニームやタマリンドなどの上広がり型・円形、キリモドキなどの紡錘型・円形とした。熱光風環境は、木陰と日向の平均気温差と平均地表面温度差を比較し、観察者の体感熱、光、風に関することとした。人のふるまいは、信仰を表す、商いをする、仲間と集まる、リラックスするがあった。設えは宗教に関するもの、基壇、東屋、屋台、パラソル、ハンモック、テーブルセットがあった。

立地と樹形の関係、立地と人のふるまいの関係、樹形と人のふるまいの関係をそれぞれ検討し、更に立地と樹形と人のふるまいの組み合わせにより Tree as Architecture のあり方の一端を明らかにした。いずれの事例も、建物内でも行われることが、樹木の下に展開されており、偶然を受け入れる生き生きとした人々のふるまいが見られた。これは、建築計画のもとで先行する目的に対応してつくられる施設型建築における人々のふるまいとは対照的である。